

■追悼■

畏友・前角博雄師を偲ぶ

鶴見大学副学長 横尾太寿

前角老師が帰国中の、去る五月十五日、突如遷化されたという訃報はわが耳を疑う痛切な知らせであった。禪によって鍛えられたあのシツカリとした背骨と肩巾はまさに頑健そのもの、健康であられるに違いない——そう信じていた私にとって師の急逝はまことに痛恨の極みであった。師とは終戦後、日米講話条約が結ばれて間もない昭和三十一年、共に曹洞宗開教留学僧として渡米した同行二人であった。当時、日本人の海外渡航は極めて規制が厳しく、外交官と

かトップの商社マン・フルブライト交換留学生や研究員などに限られ、日本交通公社に尋ねてもその渡航手続きは不如意なのであった。仕方なく私共は自らアメリカ大使館とか外務省・法務省（入管関係）などを訪れ漸く査証が得られたのであった。年間一千万人もの海外渡航者がひしめく現今にてらし往時を偲べば、今は懐かしい想い出ではある。

さて、そのアメリカの市民社会では、かのメイフラワー号のピューリタンに象徴されるピュ



ーリタニズムの伝統がどのような形で生きてい
るのであろうか。私にとって第一の関心事であ
った。その最も具体的な事例としてアメリカ人
が一市民として、毎日曜日に教会に行くことを
義務と考えている人々の如何に多いことか。単
に新教各派・旧教にかかわらない。自らを教会
出席者即ちチャーチ・ゴアと認め、吾々新参
者の外国人にも教会への出席を勧めるのであ
った。一九五〇年代後半から、この教会参加率が
全人口の六十%を超すという統計もあり、この

参加率の高
さこそアメ
リカ宗教の
特徴かと納
得したのも
であった。
一方、日本
からの仏教

各宗教団はその布教対象が主に日系人社会に向
けられ、戦前・戦中のあの激しい排日運動の中
しかも、戦中における戦時収容所内においてす
ら各宗開教師たちは血のにじむような想いで布
教に努力してきたのであった。ただその底流に
はやはり日本の伝統・檀那寺〓檀家、といった
形態があり、またそのことによって教会寺院の
維持が保たれたのも事実である。世界中から多
種多様の移民が集まり同化され、〓人種のルツ
ボ〓といわれるこのアメリカ社会に果してキリ
スト教以外の諸々の宗教的空間或いは社会的空
間があるのであろうか。渡米後間もない頃のこ
とである。そんな疑念を前角師と語り合ってい
た頃、ある知友から臨済系の老禅僧が一人黙々
として、米人を相手に坐禅の指導道場を開いて
いるので参加してみないかとの誘いをうけ、早
速御案内して頂いた。ごく普通のアメリカ人住
宅、質素な応接室での夜の参禅会。十数人のア

メリカ人が静かな暗闇の中で瞑想坐禅中であつた。鐘の音と共に部屋は明るさをもどし、そこに千崎如幻師の凜然としたお姿と慈愛に満ちた温容が現れ、十五分ばかりの法話が勿論英語で行われ、質疑応答の後散会という実に淡々とした清々しい集会であつた。この時の心象は私共にとって生涯忘れ得ない強烈な印象をとどめることになった。

私は教育界に身を投ずべく夙に帰国してしまつたのであるが、前角師が後年アメリカにとどまり、日系社会のみならず、積極的にアメリカ人社会への開教にふみ切られた道念と原型は、この千崎師の禅窟にあつたのではないかと信じている。

さきにアメリカ社会の宗教的空間を自問したが、アメリカ人の信仰における徹底した個人の自発性とその行動力とは、まさに一箇半箇を標榜する禅家の高風に連なるものであつた。千崎



勤行と語学勉

強の毎日

黒田氏から米国便り

田原市寺町光真寺住職黒田白純
二男黒田博雄氏を以て胸沢大園
科卒は北米ロスアンゼルス日
人仏教協会禪宗寺別院開教師と
て招かれ、五月渡米したが十三
日、光真寺あて次のような寵府た
り第二信を寄せた。

写真 禪宗寺別院前の黒田氏
(向つて右)

からチンアカレンヂに通い、體操
勉強に励んでいる。当地の氣候は
内地と委りなく、屋外は焼きつ
よくな暑さの日もあるが、屋外は
湿度が少なく涼きよい。別院では
「仏心」という小冊子を発行、別
院と邦人との間の連絡をとってい
る。当地では内地の珍らしい物産
を見たいといつて居るので、コケ
シ人形のよきな土産を送つてもい
たい。

当時の新聞記事 (右・前角老師、左・横尾先生)

師はそのような真面目なアメリカ人、一人、一人にセクトにとらわれず、仏陀の光明と慈悲を五十有余年に亘って伝えられたのだった。自ら「ホームレス如幻」と称し、自分たちの会所を「ただよえる禅堂」と呼び、弟子一人もたず静かに示寂されてすでに三十数余年が経った。

そして、その間、前角師は営々として曹洞の禅風を全米に開示し続けたのであった。日本の二十数倍という広大な全米州で、「草の葉一枚でもよく三世にわたって仏塔をたてうる」という仏陀のお言葉通り、この信心と道念がなければ成し得ることではない。そして、その道念は、実弟であられる黒田大円老師の主催する横浜善光寺留学僧育英会の設立によって、更に強力に支えられることになった。育英会はすでに設立十周年を迎え、法燈の国際化をめざして日本仏教各宗からの留学僧を諸外国に派遣しました、外国からの留学生は、日本国内の諸大学に受け入

れて頂き相互に将来有為なる人材の育成にあた
られている。その御聖業には只々畏敬の念高ま
るばかりである。

タゴールの詩に、「星は螢のように見えること
を怖れはしない」という一句がある。前角師は
星の如き風格をもってアメリカ社会に対された
のだが、人は師を、螢のように見ていたかも知
れない。しかし、師のもとに参集したアメリカ
の高弟たちにとっては、師はまさに星の光りで
あった。その高弟たちによって師の貴い遺業は
必ずや継承され、益々その光を放つことを信じ、
急なる遷化を悼み、御冥福をお祈りするのみで
ある。千崎師の示寂もまた臯月(昭和三十三年)
であった。その奇しき縁を偲びつつ。

